

# 日本感情心理学会第 22 回大会シンポジウム 1 「いじめと文化」

## いじめを通して見た日英子ども文化比較

金網知征

(甲子園大学)

いじめ/Bullying は、一般に「被害者加害者間の力の不均衡性と行為の反復性に特徴づけられる攻撃行動の下位分類」(Olweus, 1999) と定義され、北欧諸国を中心に始まった研究は今や全世界の問題として広く議論されている。ところが、こうした定義や理解は、西洋諸国を中心としたものであり、異なる国や文化圏によって必ずしも一致するものではない (Smith, Kanetsuna, Koo, 2007)。一部の研究者たちは異なる文化間における“いじめ”の本質的な共通性を強調するが、別の研究者たちは例えば、日本の“いじめ”と、欧米諸国の“Bullying”とは根本的に異なると主張している。いじめを日本独自の問題として捉え日本の状況を過度に誇張することは誤った事実認識や解釈につながる恐れがあるが、一方で、文化的背景や学校教育制度等の違いを無視して安易に他国の対策を模倣しても効果は期待できない。

これまでの研究によると、英国をはじめとする欧米における“Bullying”は一般に身体が大きく力の強い上級生などによって行われる身体的・言語的攻撃を中心とした個人ないしはごく少数のグループによる直接的な行為と理解されており、その背景にあるのは個の自己顕示欲求であると考えられている。一方、日本の“いじめ”は教室を主戦場とし、クラスメートを主とした同級生によって行われる関係性攻撃を中心としたより集団的かつ間接的な行為であると理解されている。森田 (1986) はこうした日本のいじめの特徴を「同一集団内の相互同質化過程における異質者への排除の圧力」であると説明し、その背景には教室という閉ざされた環境があることを示唆している。実際に、日本の子ども達は、自身が所属するクラスを基本に友人関係を形成し、学校環境に限定すれば、授業時間外の殆どの時間を自教室で同クラスの友人と過ごしていることが明らかとされている (Kanetsuna, 2004)。このような物理的にも社会的にも閉ざされた環境の中で、子ども達は、相互に監視し合い、その環境の中で“間違えた”行動をしないように細心の注意を払いながら生活している。もし何か一つでも“間違えて”しまえば、皆から一斉に制裁を受けることになるからである。いじめ場面における責任の所在を尋ねた調査 (Kanetsuna, 2004) によると、被害者に対して否定的な感情を向け、その責任を被害者自身に帰属する傾向は日本の子ども達に顕著であることが示されており、いじめが“間違えた”行為に対する制裁の手段として使われていることを示唆している。このような環境の中では、いじめに加担することや、見て見ぬ振りをする事すら“正解”となる。

本発表では、日英のいじめ/Bullying の諸特徴を子ども達の視点から概観しつつ、環境がいじめ行為に与える影響について考察し、今後の課題や対応について検討したい。